佳作

伝えたかった、ありがとう

福島県　帝京安積高等学校二年　本田　楓牙

その日は突然来た。
「おじいちゃんが亡くなったって。」
部活の大会当日の朝、父から電話でそう告げられた。僕は状況がうまく飲み込めず、泣くことすらできなかった。
祖父は病気だった。東日本大震災の後から体に違和感を覚えていたらしく、
「体が少し変な感じするんだよ。」
と言っていた。しかしその時はそれどころではないくらい忙しく、対処しないまま時間が過ぎた。病気と診断されたのは、それから数ヵ月後の、僕がまだ五歳の時だった。初めは少量の薬を飲めば通常通りの生活を送れていたが、対処するのが遅かったらしく、完治はしないと診断されていた。だんだん症状が悪化していき苦しむ祖父の姿を見て、祖母が手術するように勧めた。とても嫌がっていたが、ずっと続く苦しい生活に耐えきれなかったのか、祖父も手術を決断した。それからは、病院での入院生活が始まった。その病院は僕の家から離れた場所にあったため、半年に一回の頻度でしか見舞いに行けなかった。手術が無事終了した知らせやリハビリを頑張る祖父の写真が祖母から送られてきて、それを見るたびに元気をもらっていた。
退院したことを知らされ、すぐに退院祝いに祖父母の家に行った。そこでは昔のように元気な祖父の姿があり、久しぶりに祖父とたくさん話すことができて、楽しい時間を過ごすことができた。
僕は高校生になり、部活や勉強で忙しくあまり祖父に会えなくなった。年明けに会いに行った時は涙を流しながら喜んでくれた。そんな祖父を見て僕も泣きそうになった。
「元気か。学校は楽しいか。」
会いに行くと毎度この質問をしてきて、
「うん。楽しいよ。」
と、僕が答えると笑顔で頷いてくれた。
時間が経つにつれて、祖父の病気が悪化してきて、一日に複数の薬を多く摂取しないと動けなくなってしまった。それから、僕が祖父に会いに行っても寝たきりの時が多くなり、会話をする時間すら奪われていった。
高校二年の夏休み、部活が大型連休に入り、久しぶりにと祖父に会いに行った。その日はとても祖父の調子が良く、玄関から僕たちを迎え入れてくれた。
「楓牙、元気か。飯ちゃんと食ってるか。」
相変わらずの祖父からの質問だったが、この日はいつもと少し違った。
「勉強頑張ってるんだってな。写真見たぞ。偉いな。」
なぜかいつも以上に熱心に褒めてくれた。
「バスケもすごいな。新聞見たぞ。嬉しくてじい泣いちゃったよ。」
笑いながら話す祖父。
「もうそろそろ帰るよ。」
母から言われ、帰りの支度をしていると、祖父が僕に近づいてきて、
「何か欲しい物これで買え。」
と、笑顔で一万円札を渡され、
「また来いよ。」
と祖父。
「うん。今度ご飯食べに行こうね。」
と僕。
「そうだな。元気でな。頑張れよ。」
これが僕と祖父が交わした最後の会話となった。
祖父の葬式の日、改めてもう祖父が居ないことを実感させられ、一日中涙が止まらなかった。でも、そんな大好きな祖父だからこそ、最後の別れくらい笑顔でしっかりした態度で臨もうと思い、泣くのを堪えて頑張った。
葬式が終わり、祖父のお墓の前で最後の別れを告げた。
「苦しかったよね。お疲れ様。ゆっくり休んで。これからはずっと空から見守っててね。」
「ありがとな。また来てな。頑張れよ。」
祖父が笑顔でそう言ってくれた気がした。
「もっと伝えたかったな、ありがとうって。」
僕は心の中でそう呟いた。